

武蔵野大学教育学部こども発達学科教授、生井亮司先生をお迎えして、『子どもの豊かな感性を引き出す創作の楽しさ』をテーマに前半は講義、後半は講義と実習が行われました。

【講義】

「抽象画は好きですか。描くことは好きですか。」と聞くと、大人は「(描くことは好きだけど)どうやって描いていいかわからない。」と答えます。子どもたちに関わっている人たちはわかると思います。「子どもたちが描くものは、はじめは抽象画ですね。」子どもたちは美術、造形ともに対話しながら描いています。

「子どもは誰でも芸術家だ。問題は大人になっても芸術家でいられるかどうかである。」とピカソは言っています。保育者、教育者にとっては、まさにそうでないと、と思える言葉ですね。

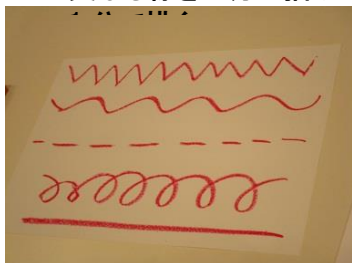
子どもがその瞬間楽しめるものが美術です。(自分自身が)何を感じていたかを、結果として表せるものです。作品を作る過程の中で、何が起こってきているか、その瞬間が大事。作っていくうちに変わってくるものです。美術は作品だけ、作品を作るための美術ではないということです。

感じたことや考えたことを自分なりに表現することで、豊かな感性や表現力が養われ、創造性が豊かになっていきます。

実習

イメージをふくらませて

①クレヨンで5種類の異なる線を1分で描く



②折紙を使って、2人で自己紹介をする



③折紙をたくさんちぎる



④ちぎったパーツを並べる



表現する楽しさ「それぞれの見方・感じ方」

付箋にタイトルを書き、タイトルは見せずに、お互いの作品を交換し鑑賞しました。その作品から感じる音を想像し付箋に記入して、作者に戻し、お互いにその理由を聞き合いました。

講師から「この創作は抽象画の世界を楽しむことを行いました。」と話がありました。

完成

⑥画面の中に①番で描いた5本の線から合う線を描く



⑤ちぎった紙を全て使い糊で貼る



講師からのメッセージ

今日の作品を現場に持ち帰り、子どもに見せてほしい。子どもはいろいろなことを言うと思います。人によってももの見方は様々。単なる色と形で造形してみるだけでも十分に面白い。

どんな時でも理想を失わず、こんな保育がしてみたい、制度とか時間を取り払ったらどんなことができるか考えてほしい。子どもが十分に子ども時代を楽しむために。

参加者からのアンケートより、重要と感じたこと・印象に残ったこと・感想

- ・“意味のないものにこそ価値を生み出すことが出来る”という話が印象的でした。子どもが今どんな世界にいるのか“今”を楽しむ子どもの感性に寄り添った保育をしていきたい。
- ・子どもの自由な発想について、もっと心を寄せ感じていきたいと思った。線や折紙を使うことで細かいことに捉われず、絵を描く楽しさを味わえた。
- ・制作の際に、「子ども一人ひとりの感性を受け入れること」、そこを更に広げていき、子どもの世界を深く広くさせてあげることが私たちの役割のひとつで、重要なことかと感じた。
- ・前半の講義は難しい内容だったが、子どもの見方と大人の見方で感じ方が違うということを改めて考えさせられた。後半は、実際に絵を描いたり、子どものように直感で思った作品作りが楽しかった。子どもたちと一緒にやってみたいと思った。